

報告1 「われわれが知覚しない間も、物は存在するのか？」

—バークリ『原理』、『対話』における、神の存在を導く議論の検討を通じて—

山川仁（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

近代のアイルランドの哲学者ジョージ・バークリは、非物質論を展開した哲学者として知られているが、その中心原理とされるのが「存在するとは知覚されることである」という考え方である。この原理によれば、われわれが実際に物を知覚しているときには、それは存在しているが、知覚していないときには、存在しないことになるように思われる。ところが、常識的に考えるならば、われわれが実際に知覚していないときでも、その物は存在し続けていることになるであろう。このように、先ほどの原理は、一見したところ、常識的信念と対立するように思われる。

しかし、バークリは、自らを常識の擁護者として明確に主張しており、常識的な信念が彼の主張と対立するどころか、むしろ彼の哲学においてこそ成り立つと論じている。それでは、彼の哲学と常識的な信念とはいかにして調停されるのだろうか？そして、バークリ哲学において、われわれが知覚していない間も、物は存在していると言えるのだろうか？

本報告では、『人知原理論』（1710年）や、『ハイラスとフィロナスの三つの対話』（1713年）で展開される、神の存在を導く議論を手がかりとすることで、このような問題がどのようにして解決されるのかということを示したい。

報告2 現代倫理学における「ヒューム主義」の系譜と起源

奥田太郎（南山大学社会倫理研究所）

現代倫理学の「ヒューム主義」とは、敢えて端的に述べるなら、行為の説明には欲求と信念の組み合わせが不可欠であるとする行為論上の心理モデルに基づき、動機づけ理由はまずもって欲求によって構成され、規範理由に関わる合理性は行為者の欲求に相関的である、という道徳心理学上の学説の一つである。その名の通り、デイヴィッド・ヒュームの哲学に由来するとされ、20世紀後半以降、メタ倫理学の道徳心理学領域における論争の岩盤として通用し続けている。しかし、「ヒューム主義」として語られるものは、実際にはヒュームの哲学それ自体とは大きく異なる内実をもつにもかかわらず、その哲学史的由来についてはほとんど問われないまま、それがヒューム自身の思考であるかの如く誤解されることも少なくない。そこで、本報告では、「ヒューム主義」という強力な思考の枠組みがどのように形成され、どのような系譜を辿って来たのかを哲学史的関心に基づき解明し、「ヒューム主義」とヒュームの哲学史的関係の機微を詳らかにすることを試みる。

報告3 英国共和主義思想と宗教性—J.ハリントンの反聖職者論を事例に—

竹澤祐丈（京都大学大学院経済学研究科）

英国共和主義思想の特質をその宗教性の分析から明らかにすることの重要性は、これまで、JGA.ポーコック、B.ウォーデン、M.ゴールディ、C.デーヴィス、そしてJ.スコットなどによって指摘されてきた。報告者はこの指摘を受け止めつつ、以下のように彼らの問題提起を解したい。（英国に限らない）共和主義思想一般が、非宗教という意味での世俗性を強調する傾向を持つこと、例えば、約100年後のフランス革命期において、従来のキリスト教に代わるものとして、地上における可視的な崇拜対象として「最高存在」を生み出したことと対照するならば、あくまでもキリスト教の枠内にとどまった〈十七世紀〉の〈英国〉という二つの限定された文脈における共和主義思想が持った特質が明らかになる。

そこで本報告では、ジェームス・ハリントンの第二の主著とされてきた *The prerogative of popular government* (1658), book 2 における反聖職者主義的主張を分析することによって、彼の政治論・社会論においてどのような意味を持ったのかを明らかにしつつ、上記の問題を考えたい。